矢田部　裕介　氏の学位論文審査の要旨

論文題目

進行性核上性麻痺の精神症状・行動障害

（Psychiatric and behavioral symptoms in progressive supranuclear palsy）

進行性核上性麻痺（PSP）は核上性眼球運動障害、姿勢反射障害、無動、その他のパーキンソニズムを特徴とする神経変性疾患であるが、前頭ー皮質下回路にも障害があり、前頭葉機能障害による多彩な認知症症状を呈する。一方、前頭側頭型認知症（FTD）でも前頭葉機能障害による特徴的な症候がみられ、PSP と FTD は臨床症候のみならず、病理学的背景にも重複する点がみられる。しかし、両疾患の精神症状・行動障害を直接比較した研究や、FTD に特徴的とされる常同行動や反社会的行動を PSP で調べた研究はない。本研究では、PSP の精神症状・行動障害を系統的かつ包括的に調査し、FTD と比較することを目的とした。対象は Kumamoto University Dementia Follow-up registry から選択された PSP 患者（N=10、男性 7 名、女性 3 名、平均年齢 69.0 歳、平均 MMSE スコア 21.4 点）と FTD 患者（N=13、男性 7 名、女性 6 名、平均年齢 66.5 歳、平均 MMSE スコア 18.3 点）の連続例である。精神症状・行動障害は Neuropsychiatric Inventory (NPI)、Stereotypy Rating Inventory (SRI)、特定の反社会的行動の有無を調べるためのチェックリストを用いて評価した。さらに、各群の主要脳部位における血流低下の有無を SPECT 画像にて評価判定した。結果は NPI 合計スコア及び NPI 下位項目スコアは二群間で有意差を認めず、アパシー、異常行動、脱抑制のスコアが高く、妄想、幻覚、うつのスコアが低いという極めて類似したパターンを示した。一方、SRI 合計スコア（p=0.027）、食行動スコア（p=0.041）においては PSP 群が FTD 群より有意に低い結果であった。また、PSP 群の 50%、FTD 群の 46%に少なくとも一つ以上の反社会的行動がみられ、このうち、不適切な性行動が PSP 群に多い傾向がみられた（p=0.068）。主要脳部位における血流低下の頻度としては、両群とも前頭葉の血流低下が多く、PSP 群の 90%、FTD 群の 100%にみられた。PSP の精神症状・行動障害が FTD と極めて似通っており、これらの両疾患に共通する症候は前頭葉血流低下と関連していること、一方常同行動は PSP では有意に軽度であり、不適切な性行動の多さとともに、PSP と FTD の鑑別に有用な症候であると考察している。

審査では、PSP と FTD とで違いがみられた常同行動と性的脱抑制を生じる責任病巣はどこか、行動障害に対する塩酸ドネペジルや SSRI の有効性、PSP と FTD の移行例の有無、PSP 臨床亜型の Richardson syndrome と PSP-P での精神症状・行動異常の検討の必要性になどについて質疑応答がなされ、申請者から概ね適切な回答がなされた。

本研究は PSP の精神症状・行動障害の特徴を明らかにし、FTD との共通点や鑑別法についてもふれ、臨床的に有用な知見を提供する研究として高く評価できる。

審査委員長　　神経内科学担当教授　　内野誠

審 査 結 果

学位申請者名：矢田部　裕介

専 攻 分 野 ： 神経精神科学

学位論文題名：進行性核上性麻痺の精神症状・行動障害
（Psychiatric and behavioral symptoms in progressive supranuclear palsy）

指　　導 ： 池田　学　教授

判定結果 ：

可　　不可

不可の場合 ： 本学位論文名での再審査

可　　不可

平成　23 年　2 月　3 日

審査委員長　　神経内科学担当教授　　内野　誠

審 査 委 員　　病態情報解析学担当教授　　安東由喜雄

審 査 委 員　　放射線診断学担当教授　　中下蓮代